

平成 27 年 4 月 7 日  
千葉木鶏クラブ  
(359 回 例会)

# 孔子と論語

「子曰く、学びて時にこれを習う、亦悦ばしからずや。朋、遠方より来るあり、亦樂しからずや。人知らずして温（うら）みず。亦君子ならずや。」〈学而第一〉  
古の教えを学びながら人生を語り合う。

そんな千葉木鶏クラブです。

安岡先生の実声テープによる論語解説は最高です。

今回から素読します。

どなたでもいつでも歓迎の千葉木鶏クラブです。

皆様のお越しをお待ちしています。

## 記

1. 日 時 : 平成 27 年 4 月 25 (土)  
AM 9 時 30 分 ~ 12 時 00 分
2. 場 所 : 千葉生涯学習センター ☎043-207-5811  
〈交通案内〉JR 千葉駅東口から 徒歩 8 分 駐車場有り
3. 会 費 : 1000 円
4. 演 題 : 「義と利」・「富と貴」
5. 講 師 : 安岡 正篤先生
6. レジューメ : 『孔子と論語』  
『安岡 正篤』講話選集より抜粋



### (1) 第四回 義と利

- |             |               |
|-------------|---------------|
| 『論語』 陽貨第十七  | < 退屈な人たち >    |
| 『論語』 衛靈公第十五 | < しまつの悪いもの >  |
| 『論語』 里仁第四   | < 義と利 >       |
| 『論語』 里仁第四   | < 利潤一点ばりの弊害 > |

### (2) 第五回 富と貴

- |           |              |
|-----------|--------------|
| 『論語』 里仁第四 | < 富貴と貧賤 >    |
| 『論語』 里仁第四 | < 自分自身を省みよ > |

※ 『論語』の現代訳『仮名論語』（1500 円）伊与田 覚先生による解説版を用意しました。

[千葉木鶏クラブ 代表兼事務局 丸島 忠夫](#)

[Email : marushima\\_t@snow.plala.or.jp](mailto:marushima_t@snow.plala.or.jp) [Tel : 0475-25-1211](tel:0475-25-1211) [Fax:0475-38-5153](tel:0475-38-5153)

平成 27 年 4 月 25 日  
千葉木鶏クラブ

## 第 4 回 義と利

### 『論語』 陽貨第十七 < 退屈な人たち >

「子曰(しのたまわく)、飽(あ)くまでも食(くら)いて日(ひ)を終(お)え、  
心を用(もち)うる所(ところ)無きは、難(かた)いかな。  
博奕(はくえき)なる者有らずや。之を為すは猶(なお)已(や)に賢(まさ)れ  
り。」

解釈：腹一杯食べて一日中ぼんやりしていようではこまったことだねえ。博奕（双六や囲碁）などのかけごとがあるではないか。まあそれでもする方が、何もしないよりまだ。

：「飽食暖衣、逸居して教なければ即ち禽獣（きんじゅう）に近し

（『孟子』 滕文公上）

：「小人閑居すれば不善をなす、至らざるところ無し」

（『大学』）

### 『論語』 衛霊公第十五 < しまつの悪いもの >

子曰く(しのたまわく)、群居(ぐんきょ)して終日(しゅうじつ)、言義(げんぎ)  
に及ば

ず、好んで小讐(しょうけい)を行う。難(かた)いかな。

解釈：一日中、おおぜいの者が集まっていながら話が道義に及ばず、こざかしいことをやっているようでは、人間の向上を望むことは難しい。

### 『論語』 里仁第四 < 義と利 >

子曰く(しのたまわく)、君子は義に喩(さと)り、小人は利に喩る。

解釈：君子は、義に敏感であるが、小人は利に敏感である。

### 『論語』 里仁第四 < 利潤一点ばりの弊害 >

子曰く(しのたまわく)、利に放(よ)りて行えば、怨み多し。

解釈：自分の利益のみを思う行えば、やがて互いに怨みあうようになることが多い

：資本主義の弊害と唯物史観の欠陥

：経済（利）と道徳（義）—— 最終的に経済を決定するものは、精神的・道徳的努力である。

：山田方谷の理財論——よく世の中の問題を処理する者は、常に事件の外に立って、事件の中に屈しない。しかるに今の経済家はみな財の中に属している。

利は義の和である。

平成 27 年 4 月 25 日

千葉木鶏クラブ

## 第 5 回 富と貴

### 『論語』 里仁第四 <富貴と貧賤>

子曰く(しのたまわく)、富(とみ)と貴(たつとき)とは、是(こ)れ人の欲(ほつ)する所(ところ)なり。其(そ)の道(みち)を以(も)って之(これ)を得(え)ざれば、處(お)らざるなり。貧(まずしき)と賤(いやしき)とは、是(こ)れ人の悪(にく)む所(ところ)なり。其(そ)の道(みち)を以(も)って之(これ)を得(え)ざれば、去(さ)らざるなり。

解釈：人は一般に裕福になり、高い地位に登りたいと願うものがある。然し正しい人の道によって得なければ、それには満足しておらない。貧困にはなりたくなく、低い地位にはおりたくないというのが一般である。然し正しい人の道によることになれば、貧困から逃れようとしてあせらない。

： 出処進退に関する 李退溪の手紙

： 公人としての出処進退 山田 方谷の手紙

### <どうすれば義(ただ)しいか

検心(自分の心を検討することの工夫)が大切>

- ① 客気が残っていないか
- ② 人をしのごうという勝心がないか
- ③ 感情にむらがあって、人が胆にさわらないか
- ④ わが身大事な私心がないか
- ⑤ 自分の地位・職分に応じ、献身的努力をしているかどうか、さらに進退の義を聖賢に問え。

### 『論語』 里仁第四 <自分自身を省みよ>

子曰く(しのたまわく)、位(くらい)無きを患(うれ)えず、立つ所以(ゆえん)を患(うれ)う。

己(おのれ)を知る莫(な)きを患(うれ)えず、知らるべきを為(な)すを求(もと)むるなり。

解釈：「地位のないのを気にするよりも、なぜ地位が得られないかを考えるとよい。自分を認めてくれないことを気にするよりも、どうすれば認められるのかを考えて努力することだ」

平成 27 年 4 月 25 日  
千葉木鶏クラブ

## 『東洋学と詩吟』

岳風会（日本詩吟学院）

指導 鈴木 岳靖 先生

「詩」は、心なりと古人は、曰う。  
「聖賢英雄の志を述べた詩」を吟ずることにより、  
志気を高め、品性を高尚にする。  
以って、人格の向上を図り 古人の生き様を己の行いの  
体得として、生命の活力としたい。

## 『朗詠』

和田 興（近代 詩吟の祖）

声気堂々 志尋るべし  
高低 長短又淵深(えんしん)  
朗吟す 今古(こんこ)の先賢の賦  
一片 千秋 天地の心

以上